術後経過は，3例とも良好であるが，炎症の再燃に関する厳重な経過観察が肝要である．

2）小児期白血病治療中に合併した心筋障害について

廣川　徹（新潟こばり病院小児科）
佐藤　誠一・塚野　真也
佐藤　勇・内山　聖（新潟大学小児科）

われわれは白血病治療中に左室機能低下を認めた症例を経験したので報告する．

【症例1】12才女児．診断：APL 現病歴：1987年1月（6才時）に APL 発症．DNR，ADM にて寛解導入．以後維持療法として ACM 投与し10月に終了した．DNR＋ADM 計 240 mg=300 mg/m^2，ACM 600 mg=750 mg/m^2 使用した．10月22日より胸痛，咳嗽が出現し左心機能低下を認めた．治療：強心剤，利尿剤，CoQ 10 投与で次第に心機能は改善した．心カテ時に施行した biopsy では異常所見を認めなかった．

【症例2】14才男児．診断：common ALL 現病歴：1984年3月（6才時）に ALL 発症．プロトコール CCLSG-I-841-C で治療開始．'87年4月治療終了．'90年2月 relapse し CCLSG-R-891 で治療再開．'92年4月心エコーで EF の低下を認め同年5月 dyspnea，胸痛出現したため同年6月新大小児科入院．入院時まで合計 ADM 460 mg/m^2，MIT 156 mg/m^2 使用された．治療：強心剤，利尿剤，captoril，等で一旦は改善したが病状は一進一退を繰り返している．

anthracycline 系による心筋障害は不可逆的なものと考えられていたが症例1では左室機能も改善し biopsy でも異常所見を認めず必ずしも不可逆的とは考えられなかった．

3）糖尿病症例における虚血性心疾患の検出
—ジピリダモール負荷心筋シンチを用いて—

津田　隆志（木戸病院循環器内科）
津田　晶子・矢田　省五
浜　斎（同　内科）

糖尿病患者の死因として虚血性心疾患の割合が高くなっており，糖尿病患者における虚血性心疾患のスクリーニングが臨床における大きな課題となっている．今回，狭心症や心筋梗塞の既往のない糖尿病症例を対象に，ジピリダモール負荷タリウム心筋 SPECT を施行し，無症候性心筋虚血例の頻度・特徴を検討した．対象はII型糖尿病患者44例（平均年齢62歳）である．SPECT 画像による虚血例は21例（48%）で，2例は2枝病変，19例は1枝病変を疑わせた．冠動脈造影では，虚血例3例中有意狭窄を1例，スパスムを1例に認め，非虚血例では，狭窄を認めなかった．虚血例は非虚血例に比し，年齢・冠危険因子・糖尿病合併症の程度に差を認めなかった．ジピリダモール負荷試験により，症状出現7例（胸痛3例），ST 低下11例に認めたが，いずれも心筋虚血の指標となりえなかった．また，アミリフィリン・亜硝酸剤使用は1例であり，本負荷試験は糖尿病患者に安全に施行できた．

第58回新潟内分泌代謝同好会

日　時　平成4年11月7日（土）
午後2時開会

場　所　新潟東映ホテル
2階　朱鷺の間

I．一　般　演　題

1）Steroid and irradiation therapy を施行した Malignant exophthalmus の2例

鈴木　克典・千葉　泰子
山崎　雅俊・他
内分泌班一同（新潟大学第一内科）

眼球突出は患者にとって，身体的のみならず，精神的にも大きな負担となるものであり，この治療法の確立はバセドウ病の臨床において，最も重要な課題の1つである．今回我々は新たに steroid と放射線の併用療法プロトコールを作製し，そのプロトコールにて治療した悪性眼球突出症2例を経験したので報告する．プロトコールは，ステロイドにベタメサゾンを使用し，放射線療法開始と同一日に開始する．ベタメサゾンは 12 mg 点滴静注から開始し 12 mg 4日間，8 mg 4日間，4 mg 4日間，その後経口で 2 mg 4日間，1 mg 4日間で終了し，総量 108 mg．放射線照射は1日 2 Gy，10日間，総量 20 Gy 照射する．なお，効果が認められた場合は，ベタメサゾン 6 mg 点滴静注4日間を追加することにする．

2例とも眼球突出度では著明な改善は認められなかったが，眼瞼浮腫，結膜充血，結膜浮腫が消失し，客観的効果判定として用いた MRI でも，外眼筋の明らかな

肥厚の改善が認められ，効果ありと判定した．経過を追って効果が増すとの報告があり，本2例も今後効果を期待したい．また更に症例を加えて，治療の開始時期，使用する放射線およびステロイドの量などを検討していきたいと思う．

2）Penderd 症候群の1姉妹例

羽入　修・中川　理
山崎　雅俊・谷　長行
伊藤　正毅・柴田　昭（新潟大学第一内科）
漆山　勝（佐渡総合病院内科）

Pendred 症候群は先天性感音性難聴と先天性ヨード有機化障害に基づく甲状腺腫を合併する症候群で，1896年 Pendred が初めて報告して以来数々の報告がなされている．症例は17歳と15歳の姉妹で2人とも幼児期より感音性難聴を認めている．両親は血族結婚ではない．今年に入り妹の甲状腺腫が急速に腫大したため精査目的に当科入院となった．Perchlorate 試験陽性でヨード有機化障害を認め Pendred 症候群と診断した．甲状腺機能，TRH 試験とも正常で，甲状腺腫の縮小効果を期待して T_4 製剤投与中である．今回 Pendred 症候群の姉妹例を経験したので，若干の遺伝学的考察を加えて報告する．

3）身体的特徴のない成人型偽性副甲状腺機能低下症Ⅱ型の1例

太田　大介・筒井　一哉（県立がんセンター新潟病院内科）
佐藤　幸示・原山　尋実（神経内科）

身体的特徴を伴わない偽性副甲状腺機能低下症Ⅱ型の症例を経験したので報告する．

症例は34歳女性．31歳頃より時々，四肢，顔面のしびれや振戦を自覚するようになり特に冬季に多く認められた．その後も同様の症状が続き，これらの症状を主訴として当科も受診した．当科受診時，低 Ca 血症にもかかわらず血中副甲状腺ホルモン高値であったため，偽性副甲状腺機能亢進症を疑い Ellsworth-Howard 試験を施行した．その結果，尿中 cAMP 反応陽性，尿中P反応陰性であった．また，腎原性 cAMP 3.89 nmol/dl と高値であった．身体的特徴をともなわなくとも正確に施行された Ellsworth-Howard 試験がその条件を満たせば診断して良いことになっており，本例は偽性副甲状腺機能低下症Ⅱ型と診断した．

4）健常男性における L-arginine 負荷にたいする血清 Ca^{2+} 依存性一酸化窒素合成酵素の反応

山崎　雅俊・伊藤　正毅
他・内分泌代謝班一同（新潟大学第一内科）

【目的】最近我々は，各種疾患や病態への関与が示唆されている一酸化窒素（NO）を生体内で生成する Ca^{2+} 依存性一酸化窒素合成酵素（NOS）の peptidebased radioimmunoassay（RIA）を開発し，人血中にかかる酸素の免疫活性が存在することを明らかにした．そこで，NO の合成前駆体である L-agrinine 負荷にたいする血中 Ca^{2+} 依存性 NOS 免疫活性の濃度変化を検討した．【方法】健常男性9名に対して体重 1 kg 当り 0.5 g の内分泌検査用 L-agrinine を30分間静脈点滴し，負荷前，負荷後30，60，120，180分に静脈採血し，血清を開発した RIA 用検体に供した．【結果】全例の比較では，負荷前の NOS 免疫活性の値（mean±SE）は 148.8±7.89 μg/L であるのに対して，180分後の値は 149.5±10.3 μg/L であり，有意な変化は認められたかったが，個々の比較では，負荷により有意に上昇する群と低下する群が存在することが判明した．【総括】現時点で L-agrinine 負荷に対する反応に相違が健常者間に認められることが臨床的に意義があるか不明であるが，興味ある観察と思われた．

5）食塩負荷による食後過血糖の増強
—胃排出能からみた検討—

中村　宏志・他
内分泌班（新潟大学第一内科）

【目的】最近，炭水化物の摂取による食後過血糖が食塩の同時摂取により増強されるという報告がなされているが，その機序は明らかになっていない．今回，我々は，食塩の摂取が胃排出能に影響を及ぼすかどうかについて検討した．【対象および方法】対象は，健常人7名．早朝空腹時に流動試験食 300 ml を飲用させ，超音波法により胃排出時間を求めた．また，試験食摂取前と摂取後30分，60分，90分，120分，180分の血糖値，IRI，ガストリン，モチリンも測定した．さらに別の日に，食塩 5 g を加えた試験食を用いて同じ検査を施行した．【結果】食塩添加食の方が，食塩非添加食に比して，負荷30～120分後において，血糖値の増加量が有意に高値であった．食塩添加食が食塩非添加食に比して，有意に胃排出時間（半減期）が短縮していた．ガストリン，モチリンの負荷前後での変化では，両者とも，食塩添加食と食塩